

## 第 43 回 IAEE International Conference に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所  
専務理事 首席研究員  
小山 堅

7 月 31 日から 8 月 4 日にかけて、International Association for Energy Economics (IAEE) の International Conference が東京で、政策研究大学院大学 (GRIPS) を会場として開催された。IAEE は、世界のエネルギー・環境問題を、経済の視点を中心としつつ、政治・安全保障・地政学・技術・社会等の幅広い角度から分析・検討を行うプラットフォームとして機能している国際学会である。その International Conference は、年に一回、世界各地を持ち回りで開催され、今回は弊所および GRIPS の共催の下での東京開催となった。

なお、第 41 回 International Conference は 2018 年にオランダ・フロンゲンで、第 42 回会議は 2019 年にカナダ・モントリオールで開催された後、COVID-19 のパンデミックの影響で 2020 年は開催されず、2021 年は初めての全面オンライン会議の形で開催された。そして今回は、2019 年以来 3 年ぶりに、対面とオンライン参加を組み合わせたハイブリッド方式での開催となった。7 月以降、東京を中心に日本で新型コロナ感染拡大が第 7 波を迎え急速に感染者数が拡大する状況となったが、無事に全ての日程を恙なく実施して終了を迎えることができた。この状況下、会議全体を通しての参加者 (登録ベース) は 600 名を超え、そのうち 400 名強が対面参加、さらにその半数以上が海外参加者となった。ちなみに、東京での IAEE の International Conference 開催は 1986 年以来、36 年ぶり 2 回目である。前回の東京での会議では、筆者は弊所入所 2 か月目の新人として最初の大規模国際会議に参加する経験を得た。36 年ぶりの東京開催は筆者にとっても感慨深いものであった。

今回の東京での会議の総合テーマは、「Mapping the Energy Future: Voyage in Uncharted Territory」であった。8 月 1 日に行われた Opening Plenary で指摘された通り、まさに Voyage in Uncharted Territory (海図なき航海) という言葉がこれほどぴったりする時期はないほどに、今日の国際エネルギー情勢は混迷し、不確実性が高い。その状況下で、エネルギーの将来・未来をどう描くか、という問題意識に沿って、活発な議論が行われた。Opening および Closing Plenary の他、Dual Plenary が 8、Round Table が 4、Concurrent Sessions が 75 実施され、それぞれのテーマでプレゼンテーションやスピーチ、議論や質疑応答が活発に行われた。

全体を通して、世界のエネルギー・環境問題に関する重要な課題として、カーボンニュートラルを目指す世界の脱炭素化の取り組みと、そのためのエネルギー政策・対策、その実現に向けた課題とその克服に向けた議論が重要な中心の一つであったことは間違いない。2020 年以降、世界的に加速した脱炭素化への取り組み強化に向けた潮流は、現在でも世界の重要課題であり、今後も長期的に世界のエネルギーの将来像を変えていく大きな力である。従って、会議の議論で本問題への極めて高い関心が寄せられたことは当然であった。

しかし、Voyage in Uncharted Territory という言葉の重要性を、参加者の心の中に強く刻み込むことになったのは、やはりロシアによるウクライナ侵攻に端を発したウクライナ危機の現実化・深刻化と、それによるエネルギー安全保障問題への世界的な関心回帰、そしてエネルギー地政学や国際エネルギー秩序を巡る問題への関心と高まり、ということであろう。これまで、IAEE の International Conference を始め、多くの国際エネルギー会議

に参加してきた筆者にとっても、今回の東京での議論において、エネルギー安全保障・エネルギー地政学がこれほどまでにクローズアップされ、重要な関心事に浮上している、ということを理解することで、世界のエネルギー論壇における劇的な変化を実感する機会となった。その意味で、以下では、筆者がモデレータを務めることになった、Dual Plenary 1「Energy Geopolitics: Challenges and Opportunities for Asia」での議論を中心に筆者にとって特に印象に残った重要なポイントを整理してみたい。

第1に、世界的にエネルギー価格が大きく高騰し、エネルギー市場が不安定化する中、今後のロシアのエネルギー供給に関する不安もあって、必要不可欠な物資であるエネルギーを如何に安定的に、手ごろな価格で入手するか、が改めてエネルギー問題の中心に据えられており、それはある意味で世界共通の課題となっていることを実感した点である。ロシア依存度の高い欧州はもとより、エネルギー価格高騰が政権の支持率を左右する米国、冬場の電力需給逼迫を懸念する日本など、先進国はいずれもエネルギー安全保障が最優先課題となっている。しかし同時に、今回のエネルギー価格高騰で最も深刻な悪影響を被っているのがアジアを含めた発展途上・新興国であるという点が指摘されたことが重要であった。国際エネルギー市場の安定を守ることは、自国のエネルギー安全保障を確保することだけでなく、世界の安定と発展を守ることでもある。自国優先だけに囚われず、地球益としてのエネルギー市場安定に向けた取り組みの重要性を意識する必要がある。

第2に、今日の国際エネルギー市場はまさに不安定化の最中にあり、今後それがもっと悪化・深刻化していく可能性が高いという現実も意識せざるを得ない、ということを実感させられた点を挙げたい。エネルギー安全保障が重視される中、多くの場合は、消費国にとっての Security of Supply に関心が当てられる。これは当然のことではあるが、同時に生産国にとっての Security of Demand の問題も見逃すことはできない。消費国でのエネルギー安全保障対策強化の流れが、脱炭素化への転換の潮流に相まって、化石燃料の需要低減が進めば、資源国・生産国の経済そして政治・社会の動揺が進む。長期にわたるエネルギー転換の中で、化石燃料市場の安定は引き続き重要である。その中でも中東の安定をどう図るか、という問題はウクライナ危機の陰に隠れる形になるところもあるが、国際エネルギー市場安定のカギを握り続ける。しかし、それ以上に深刻なのは、ウクライナ危機を契機に明確化してきた、国際社会の分断とそれによるエネルギー市場の混迷であろう。自由・民主主義などの価値観を標榜する「西側」とその西側に対峙する中国やロシアなどが、それ以外の国々も巻き込んで世界的な対抗・対立構造を形作る世界で、エネルギーは戦略的な物資となり、政治的な「武器」としての側面を強めてしまうような世界が仄見えている。ウクライナ危機の長期化が予想され、その出口が見えない中、今後の国際エネルギー情勢は、Voyage in Uncharted Territory をさらに強いられることになり、それを前提としたエネルギー戦略・政策が必要になる。

第3に、上述の決して明るくない、厳しい世界の将来像の中でも、長期を見据えて、国際エネルギー秩序をどう再構築するか、そのため、各国・各主体が何をすべきか、秩序再構築のための国際的なアーキテクチャーをどうすべきか、などを今から真剣に考えていく必要がある、と感じたことを指摘したい。1973年の第1次石油危機の際、「アラブ石油禁輸」によって、当時の西側石油消費国の協調は一時瓦解した。それを立て直すために設立されたのが国際エネルギー機関である。以来、世界は国ごとにエネルギー安全保障確保の取り組みを進めつつ、IEA などを中心に国際協調を重視してきたが、現下のウクライナ危機でその体制が動揺している。今冬にかけて、今後の事態の展開次第では深刻なガス不足に直面する欧州とサハラ以南2問題で揺さぶりをかけられる日本が、ゼロサムゲームの下で獲得競争を強いられるような状況が起こりかねない。国際エネルギー秩序維持の重要性を再確認して、主要国間での市場安定化のための相互努力を強化し、共有し、協力する何らかの枠組み・国際取り組みを具体化していくことが求められているのではないだろうか。

以上